

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No.142 September 2015

研究の最前線

◆ 2015年度夏期シンポジウム「ロシアとグローバルヒストリー」開催される ◆



セッション2のようす

センターは2015年7月30～31日に、夏期国際シンポジウム「ロシアとグローバルヒストリー」を開催しました。科研費基盤研究A「比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究」と科研費基盤研究C「軍事と外交から見るソ連の帝国建設：カリム・ハキーモフ（1892-1937）の研究」に加え、サンクトペテルブルグ・ヨーロッパ大学も共催になりました。今回は、ICCEES世界大会に来日されたベテランと新進気鋭の歴史家をお招きすることが

でき、18世紀から1980年代までのロシア・ソ連を世界史の文脈で考えるものになりました。シンポジウム前日の29日には、共同利用・共同研究拠点事業「中央ユーラシア・ムスリムの歴史・社会に関する共同研究班」の枠で、海野典子さん（東京大・院）が、ロシア／ソ連周辺のムスリム知識人の越境的活動に関するセッションを組んでくださり、刺激的なスタートを切ることができました。

近年のロシア史研究は、ロシア帝国とソ連邦をユーラシア大陸の中に位置付ける思考を通じて、冷戦期につくられた自己充足的な像をかなりの程度克服してきました。近年影響力のある業績が、ロシア以外の地域に関する研究を思考の糧として頻繁に参照しているのは偶然ではありません。しかしグローバルヒストリーとなると、イギリス帝国研究者が席捲し、ロシア／ユーラシアは抜け落ちるか、表層的に紹介されるにすぎません。こうした状況の克服に少しでも貢献すべく、今回のシンポジウムの討論者には、イギリス帝国研究とオスマン帝国研究の第一線で活躍される方々をお招きしました。そのことで、ペーパーでは必ずしも明確ではなかったグローバルな局面が討論の中で引き出され、整理されることがしばしば起こりました。また方法論としても、様々なレベルの政策立案者が世界に向けて発信する自画像と現実との関係、「国際公共財」に象徴されるように人々が地球規模で物事を考えるようにな



シンポジウムの主な参加者

る契機、グローバルに見える交通の特殊性と限界、伝記の有用性など、今後発展させていくべき研究のヒントが盛りだくさんでした。参加者は86名（うち外国人31名）と例年より少なめでしたが、議論は大いに盛り上がりました。パネリストおよび関係者の皆様に深く御礼申し上げます。以下は29日～31日のプログラムです。[長縄]

7月29日（水）

16:30-18:15 Junior Scholars' Session: Russia and the USSR as Destinations for Mobile Muslim Intellectuals in the First Half of the Twentieth Century

Noriko Unno-Yamazaki (Tokyo University) "Between the Qing Dynasty and the Russian Empire: Dungans and Uyghurs in Central Asia in the 1910s"

Masato Toriya (Sophia University) "Indian Muslims and the Soviet Union in the 1910s and 1920s: The Case of Zafar Hasan Āibak's Āp Bitī"

Ryosuke Ono (Keio University) "Turkestan Seen from an Émigré Turcologist: Zeki Velidi Togan, Yeni Türkistan, and His Letters (1927-1932)"

司会：Tomohiko Uyama (SRC)

Slavic-Eurasian Research Center 2015 Summer International Symposium
Russia and Global History

Thursday, July 30

10:00-10:15 Opening Remarks

10:15-12:15 Session 1: Between Imperialism and Colonialism: Imperial Rivalry and Politics on the Ground

David Schimmelpenninck van der Oye (Brock University, Canada) "The Kashgar Question: St. Petersburg, Tashkent and Yakub Beg"

Alexander Morrison (Nazarbayev University, Kazakhstan) "Competitive Emulation and Anglo-Russian Rivalry in the Conquest of Central Asia"

Paul du Quenoy (American University of Beirut, Lebanon/SRC) "'Showered with Privileges by Our Government': Russian Self-Presentation to Muslim Communities in Ottoman Syria"

Discussant: Yasu'o Mizobe (Meiji University)

Chair: Tomohiko Uyama (SRC)

13:45-15:45 Session 2: Cross-cultural Stimulation: Russia's Globalizing Economy

Ekaterina Pravilova (Princeton University, USA) "Not by Bread Alone: Russia and the Global Market of Cultural Goods"

Igor Khristoforov (Higher School of Economics, Russia) "Professors and Bankers: Russian Economic Thought and the Formation of the Modern Financial System in the Nineteenth Century"

Yukimura Sakon (Niigata University) "The Great Game of Tea: Russian Tea Trade in the Late Nineteenth and Early Twentieth Centuries"

Discussant: Shigeru Akita (Osaka University)

Chair: Shinichiro Tabata (SRC)

16:00-18:00 Session 3: Russia at the Crossroads: Human Mobility Across Empires

Willard Sunderland (University of Cincinnati, USA) "Built to Move: Trades and Technologies of Worldliness in the Eighteenth Century"

Philippa Hetherington (University of Sydney, Australia) "Laboratory of Migration: Multiple Mobilities and the History of the Black Sea"

Norihiro Naganawa (SRC) "Russia's Place in the Global Muslim Connections, ca. 1800-1930: Sufism, Nationalism, and Anti-Imperialism"

Discussant: Hidemitsu Kuroki (Tokyo University of Foreign Studies)

Chair: So Yamane (Osaka University)

Friday, July 31

9:30-10:15 Special Seminar: Empire and Technology

Marsha Siefert (Central European University, Hungary) "Telecommunications Rivalries in the Russian Borderlands before 1914"

Chair: Norihiro Naganawa (SRC)

10:30-12:30 Session 4: Divided Communities: Russian Revolution and the World

Boris Kolonitsky (European University at St. Petersburg, Russia) "The February Revolution of 1917 as a World Revolution"

David McDonald (University of Wisconsin-Madison, USA) "1917 in a Corner of the Russian Diaspora: Revolution and the Rebuilding of Dukhobor'e"

Taro Tsurumi (Saitama University) "Russian Jews after the Imperial Collapse, East and West"

Discussant: Satoshi Mizutani (Doshisha University)

Chair: Kiyohiro Matsudo (Hokkai-Gakuen University)

13:45-15:45 Session 5: A Wide Arc of Activity: The Soviets' Transformative Role in the Interwar East

Samuel J. Hirst (European University at St. Petersburg, Russia) "National Economics: Soviet-Turkish Trade in the Interwar Period"

Yaroslav Shulатов (Hiroshima City University) "Japan's Place in Soviet Far Eastern Policy during the 1920s"

Sören Urbansky (Ludwig Maximilian University of Munich, Germany) "'The Border Is under Lock and Key': Material and Ritualistic Reaffirmations of the Manchurian-Soviet Border during Times of Conflict"

Discussant: Harumi Goto-Shibata (Tokyo University)

Chair: Tetsuro Chida (SRC)

16:00-18:00 Session 6: Cold War and Decolonization: The Soviets' Role in the Postwar East

Marsha Kirasirova (New York University Abu Dhabi, UAE) "Soviet Aftershocks of Iran's 1953 Coup: A CIA Operation against Abdulquasim Lahuti, 1953-1954"

Artemy M. Kalinovsky (University of Amsterdam, The Netherlands) "'A Torch Lighting the Way to Progress and Civilization': Soviet Central Asia as a Model of Development"

Jun Fujisawa (Waseda University) "In Pursuit of Natural Resources: The CMEA Policy of 'Coordination' in the Developing Countries"

Discussant: Ichiro Maekawa (Soka University)

Chair: Manabu Sengoku (SRC)

◆ センター 60 周年 ◆

本センターが北大法学部附属の研究施設として正式に発足したのは1955年7月ですので、本2015年にセンターは無事「還暦」をむかえたこととなります。センターではこれを記念して、12月10～11日予定の冬期シンポジウムを、センター60周年の祝いを兼ねた行事とすべく計画中です。センター設立の具体的な経緯、共同利用・共同研究拠点に認定されるまでの活動史、20世紀史を背景としてみた場合のセンター60周年の意味、地域研究にとっての記念・記憶の意味、今日のスラブ・ユーラシア研究の課題、未来への展望など、複数の観点からのプログラムが想定されています。全体のテーマは Between History and Memory: Connecting the Generations at SRC 60 (仮題)。懐かしい諸先輩や、交流のあった海外のゲストなども、お招きする予定です。詳しいプログラムは9月以降のセンター・ホームページおよび当ニュースレターをご参照ください。多くの皆様のご参加をお待ちします。[望月]

◆ 北大における学際的な北極域研究のスタート ◆

学際的な北極域研究の推進を目的として、4月に北海道大学に北極域研究センターが設立されました。スラブ・ユーラシア研究センターでも、田畑がその運営委員や兼務教員になるなど、提携を深めています。北極域研究センターには5つの研究グループが設けられ、田畑が人文社会科学研究グループのグループ長を務めています。また、北大が国立極地研究所 (NIPR)、海洋研究開発機構 (JAMSTEC) とともに応募していた文科省の北極域研究推進プロジェクト (環境技術等研究開発推進事業費補助金) (ArCS: Arctic Challenge for Sustainability) が採択され、今年度から5年の予定で実施されることになりました。このなかには、「北極の人間と社会:持続的発展の可能性」という人社系のサブ・プログラムが含まれており、スラブ・ユーラシア研究センターが中心となって、東北大学東北アジア研究センターや神戸大学大学院国際研究協力科とも連携しながら、進めていくことになっています。[田畑]

◆ 2015 年度科学研究費プロジェクト ◆

2015年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです (8月13日現在:「学振特別研究員奨励費」及び「研究成果公開促進費 (学術図書)」を除く)。[事務係]

基盤研究 (A)

- 宇山 智彦 比較植民地史:近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究 (2013-17年度)
- 岩下 明裕 ボーダースタディーズによる国際関係研究の再構築 (2014-17年度)
- 田畑伸一郎 ユーラシア地域大国 (ロシア、中国、インド) の発展モデルの比較 (2015-18年度)
- 家田 修 被災者参画による原子力災害研究と市民復興モデルの構築:チェルノブイリから福島へ (2015-17年度)

基盤研究 (B)

- 越野 剛 社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究:旧ソ連・中国・ベトナム (2013-16年度)
- 野町 素己 東欧革命以降のスラヴ世界におけるミクロ文語の総合的研究 (2013-16年度)
- 原 暉之 サハリン (樺太) 島における戦争と境界変動の現代史 (2013-16年度)
- David Wolff 中露関係の新展開:「友好」レジーム形成の総合的研究 (2015-18年度)

基盤研究 (C)

- 高本 康子 近代日本の画像メディアにおける「喇嘛教」表象の研究 (2012-16年度)

長縄 宣博 軍事と外交から見るソ連の帝国建設：カリム・ハキーモフ（1892-1937）の研究（2013-16年度）

後藤 正憲 ポスト社会主義国における経営主体のアントレプレナーシップに関する文化人類学的研究（2014-2016）

井潤 裕 帝国日本における「北進論」の特質と影響：樺太と千島を例に（2014-16年度）

挑戦的萌芽研究

家田 修 東欧世界の成立と日本：日本・東欧関係史の再構築と新たなスラブ・ユーラシア史（2015-17年度）

若手研究（A）

高橋美野梨 自治と気候変動：デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」と「対内的自治」（2014-17年度）

若手研究（B）

地田 徹朗 戦後ソ連のアラル海流域環境史：人間活動と生態危機（2013-16年度）

金山 浩司 1940-50年代日本における科学と技術の相互関係：思想的・社会的探求（2015-17年度）

研究活動スタート支援

高橋沙奈美 現代の聖人：ロシア正教会における列聖と聖人崇拜（2014-15年度）

◆ 北大祭期間中にスラブ・ユーラシア研究センターを一般公開 ◆

今年で3回目を迎えたスラブ・ユーラシア研究センターの一般公開が6月6日（土）におこなわれました。今年も、センター一般公開は理系の4研究所（電子科学研究所、低温科学研究所、遺伝子病制御研究所、創成研究機構）との合同一般公開の枠内でおこなわれました。今年は一日のみの開催でしたが、二日間開催をした昨年を上回る330名の方にご来場いただきました。今回は、「もっと楽しく！もっと詳しく！スラブ・ユーラシア展」と題し、センター教員



サイエンストークのようす

による最新の研究成果に関するパネル展示と公開講座（サイエンストーク）を連動させ、来場者の皆さまにセンターでの研究をより身近に感じていただき、かつより詳しく知っていただくという工夫をしました。また、大人から子供まで楽しめるスラブ・ユーラシア地域の絵本の展示、アニメ上映、スラブ・ユーラシア地域の塗り絵といったコンテンツを用意しました。センターは、1955年（昭和30年）7月1日に法学部附置スラブ研究所が創設されてから60周年をむかえました。一般公開では、「スラブ・ユーラシア研究センター60周年のあゆみ」と題し、センターの沿革について資料と解説パネルで示す特別展示も組織しました。展示パネルはセンターの笹谷めぐみ研究支援推進員のデザインによるものです。

サイエンストークは、田畑伸一郎・センター長による「油価下落と制裁：ロシア経済は本当に危機なのか？」、地田徹朗・助教による「『20世紀最悪の環境破壊』の教訓：アラル海災害から学ぶべきこと」という2本立てでした。講演内容と研究展示を連動させ、アクチュア



親子で楽しい塗り絵コーナー

は、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」で培った研究成果のパネル展示という成果公表の仕方とメソッドを残すという意味合いもあり、来年度以降も分かりやすくかつ知的刺激に富んだコンテンツを考えて継続してゆければと思います。ご来場いただいた市民の方々、一般公開のログをお手伝いいただいたスタッフの皆さま、どうもありがとうございました。[地田]

ルな問題についてわかりやすく視覚と聴覚で示すという手法は来場者の方にも好評でした。センター4階のラウンジスペースを活用してサイエンストークを含めすべてのコンテンツを一つの会場に詰め込んだため、来場者とスタッフ・講師との距離は非常に近く、サイエンストークでの質問がしやすくなり、子供さんたちを含め多くの市民の方と交流ができたことはとてもよかったですと思います。

センター一般公開はまだ3回目の試みではありますが、センターの行事として徐々に定着してきた感があります。一般公開に

◆ UBRJ セミナー「根室からみた北方領土問題」を開催 ◆

6月27日(土)、UBRJ セミナー「根室からみた北方領土問題：人々の『想い』と『本音』にせまる」が開催されました。土曜日午後の開催だったにもかかわらず、50人もの来場があり大盛況でした。冒頭でDVD『北方領土を望んで：人々の想いは今』の上映がおこなわれ、セミナーの後半では、昨年、一昨年と根室市役所でインターンをおこない、本年もセミナー開催直前まで根室市で調査にあっていたフランス人留学生ファベネック・ヤン氏による講演がおこなわれました。ヤン氏はオホーツク海域での漁業の現状についても言及し、ロシア議会がサケ・マス流し網漁禁止法案を可決した直後の時期だったこともあり、フロアから多くの質問が寄せられました。[地田]



◆ UBRJ セミナー「東南アジアの境界：タイ北部国境から眺める」を開催 ◆

7月13日(月)、広島大学の招待で来日したタイ北部のメーファールアン大学の講師3名をお招きし、UBRJ セミナー「東南アジアの境界：タイ北部国境から眺める」を開催しました。冒頭、同大社会イノベーション学部長のシリポーン・ワルチャック准教授より、タイでの境界研究の現状とメーファールアン大学の取り組みについて説明があり、その後、2名の若手研究者より、タイ北部国境地域での災害対応と地方自治、タイ＝ミャンマー国境での越

境宝石取引の変遷について研究報告がなされました。熱い議論はセミナー後の懇親会にまで続き、大いに盛り上がりました。本年度は、Association for Borderlands Studies 日本チャプターの発足年でもあり、UBRJ は今後とも東南アジア地域を含む国際的な境界研究コミュニティとのネットワーク強化に努めてまいります。[岩下/地田]



◆ ジョイント・ワークショップ ◆

「社会主義の記憶と現在：宗教・政治・ナショナリズム」を開催

8月1日(土)におこなわれた本ワークショップは、20世紀ロシアにおけるロシア正教をテーマとしたもので、主催者はおそらく日本で初めての試みであったのではないかと踏んでいます。ポスト社会主義の旧ソ連圏で問題となっている宗教対立や宗教と政治、ナショナリズムの関係を考える時、本ワークショップで論じられたような問題に通じていることは大変重要です。本ワークショップでは、ソ連時代からポスト・ソ連時代のロシア正教についての著名な専門家3名を招き、この研究分野の国際的な進展について紹介することができました。

本ワークショップは、本学の協定校であるドイツ、ブレーメン大学の東欧研究センター(OEG)との協力のもとおこなわれました。本学の大学間交流事業の助成を得て、ニコライ・ミトローヒン氏を招へいし、またドイツ側の助成を得て、ウルリケ・フーン氏が参加しました。さらに、昨年、外国人特任教員としてセンターに滞在したイリーナ・パプコヴァ氏(ジョージタウン大学)の参加を得ることができました。センターからは高橋沙奈美が参加しました。フーン氏は第二次大戦後の人類学者らによるフィールドワークについて、高橋はソ連時代の聖人崇敬について、パプコヴァ氏はソ連時代のロシア正教会や聖職者の現代的評価について、ミトローヒン氏は現代のロシア正教研究が抱える諸問題について、それぞれ報告をおこないました。国内からの参加者に加えて、夏期国際シンポジウムに参加したゲストや滞在中の外国人研究員も参加し、20名近い参加者を得て、活発な議論をおこなうことができました。ご参加いただいた方々に、この場を借りてお礼申し上げます。[高橋]

◆ 九州大学にて第3回アジア太平洋ボードスタディーズ・セミナーを開催 ◆

8月9日(日)、九州大学箱崎キャンパスにて、九州大学アジア・太平洋未来センターとUBRJが主催した第3回アジア太平洋ボードスタディーズ・セミナー「Lessons from European and Central Asian Borders for Asia-Pacific Future Studies」が開催されました。前半はUBRJとの関係が深い東フィンランド大学カレリア研究所のイルカ・リッカネン教授とジェームズ・スコット教授による、EUの東方政策や地政学的思考の変化に関するセッションが組まれました。後半は、アラル海救済運動を長年主導しているロシア科学アカデミー動物学研究所のニコライ・アラディン教授、中央ア



ジアの水資源・エネルギー問題に関する著作を昨年刊行したロシア科学アカデミー東洋学研究所のエカチェリーナ・ポリソヴァ女史による旧ソ連領中央アジア、アラル海流域での越境水資源問題に関するセッションが組まれました。両セッションとも活発な議論・意見交換がなされました。今後、UBRJは九州大学アジア・太平洋未来研究センターとの連携をさらに強化し、日本の境界研究を先導してゆきます。[地田]

◆ 2015年度鈴木・中村基金奨励研究員決まる ◆

2015年度鈴木・中村基金奨励研究員は以下の3名の方に決定しました(滞在日程順)。[家田]

採用決定者・所属	テーマ	予定滞在期間	ホスト教員
オウンバートル・ムンヘジン 慶應義塾大学大学院	中ソ対立のモンゴル要因	2015年 6月15～29日	ウルフ
大場 佐和子 神戸大学大学院	①複雑化している憲法律の制定と改廃の状況について ②ロシアや中欧諸国、それ以外のスラブ・ユーラシア圏の司法制度や法文化について	2015年 8月27日～ 9月17日	仙石
重松 尚 東京大学大学院	両大戦間期リトアニアの政治思想や少数民族政策および第二次世界大戦中のリトアニアにおける民族対立	2015年 12月7～25日	仙石

◆ 2015年度特任教員(外国人)決定 ◆

2015年度の外国人特任教員として以下の7名の採用が決まりました。北大全体で外国人教員制度の見直しの結果、2015年度からセンターの外国人特任教員の選考方法が大きく変わりました。応募者の中からセンター内部で候補者を絞って申請をおこない、大学全体の「外国人招へい教員選考委員会」による審査を経て最終的に決まるという方式になりました。[山村]

デュ・クノワ、ポール (du Quenoy, Paul)

所属・現職：ペイルート・アメリカン大学歴史学部 准教授

研究テーマ：帝政ロシアと中東

予定滞在期間：2015年7月21日～2015年11月20日(4ヵ月)

受入教員：長縄宣博

カラダロフ、トヒル (Kalandarov, Tokhir)

所属・現職：ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所 上級研究員

研究テーマ：中央アジア移民とロシア社会の文化交流の問題

予定滞在期間：2015年10月1日～2016年3月31日(6ヵ月)

受入教員：宇山智彦

キム・スファン (Kim, Soo Hwan)

所属・現職：韓国外国語大学・ロシア語学科 准教授

研究テーマ：類型論の観点から見た「日常」のロシア的概念

予定滞在期間：2015年12月1日～2016年2月28日(3ヵ月)

受入教員：越野剛

キルムゼ、シュテファン (Kirmse, Stefan)

所属・現職：ベルリン・フンボルト大学東欧史学科 研究員・講師

研究テーマ：帝政ロシア後期における法と帝国：クリミアとカザンの新法秩序

予定滞在期間：2015年11月1日～2016年2月28日(4ヵ月)

受入教員：長縄宣博

コルクト、ウムト (Korkut, Umut)

所属・現職：グラスゴー・カレドニアン大学 准教授

研究テーマ：ユーラシアにおけるハンガリーの再位置づけ：言説、ビジネス・ネットワークおよび21世紀ハンガリー保守主義外交

予定滞在期間：2015年6月15日～2015年9月14日（3ヵ月）

受入教員：家田修

ブライア、ダニエル (Prior, Daniel)

所属・現職：マイアミ大学歴史学部 准教授

研究テーマ：クルグズの口承叙事詩「マナス」の研究と翻訳

予定滞在期間：2015年7月18日～2015年12月17日（5ヵ月）

受入教員：宇山智彦

シャブレイ、パーヴェル (Shabley, Pavel)

所属・現職：チェリャビンスク国立大学コスタナイ分校 准教授

研究テーマ：カザフステップとトルケスタンにおけるムスリム宗務局に関する言説（19世紀末から20世紀初頭にかけて）

予定滞在期間：2015年10月1日～2015年12月31日（3ヵ月）

受入教員：長縄宣博

◆ グチノヴァさんの滞在 ◆

ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所の研究員エリザ＝バイル・グチノヴァさんが、5月から10月末まで学振招へい研究者としてセンターに滞在しています。研究のテーマは第二次大戦後に抑留された日本兵によるスターリン期ソ連の視覚表象です。[越野]

◆ クレアさんの滞在 ◆

6月末から1ヵ月間ほど、グラスゴー大学ロシア・中東欧研究センターの大学院生、ジェラード・クレア (Gerard Clare) さんがセンターに滞在されました。ロシア極東の発展について研究されている方です。センターでの滞在后、幕張の大会で報告されました。[田畑]

◆ プザノヴァさんの滞在 ◆

オックスフォード大学大学院博士課程在学中のオリガ・プザノヴァさんが、7月22日から10月23日までの日程でセンターに滞在しています。プザノヴァさんは日露青年交流センター若手研究者フェローに採用され、センターが受け入れ機関となりました。研究テーマは「明治時代の日本文化への正教の適応」です。[岩下]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース141号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。ただし、今号で別途紹介したものは省略します。[大須賀]

5月20日 Igor Botoev (ブリエート国立大、ロシア) 「ソ連文学における日露戦争の記憶」(ユーラシア表象研究会)

5月25日 ロシア・ビジネスセミナー2015 田畑伸一郎 (センター)、本村真澄 (独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構) 「ロシア経済の行方：経済制裁、原油安、ルーブル安に直面するロシア」

5月26日 菊田悠 (センター) 「心は神に、手は仕事に：ウズベキスタンの職人とイスラーム守護聖者」；高橋美野梨 (センター) 「北極への視線：デンマーク領グリーンランドの『自治』を出発点として」(北海道スラブ研究会)

- 6月4日 梅村博昭「『歴史は条件節を持たない』か？ レフ・グルスキイ『ロマン・アルビトマン ロシア第二代大統領伝』(2009年)をめぐる考察」(ユーラシア表象研究会)
- 6月15日 スラブ・ユーラシア研究センター・北極域研究センター共催セミナー Gail Fondahl (ノース・ブリティッシュ・コロンビア大、カナダ) “Indigenous Land Rights in the Russian Federation: A Quarter Century Onward”
- 6月15日 第13回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 仙石学(センター)「少子高齢化を東欧から考える：東欧諸国の福祉政策」
- 6月22日 オユンバートル・ムンヘジン(慶應義塾大・院)「中ソ対立のモンゴル要因」(鈴川・中村奨励研究員研究報告会)
- 6月25日 秋山徹(早稲田大)「遊牧英雄からイスラーム的遊牧英雄へ：ロシア統治下中央アジアにおける現地協力者の動向をめぐる一考察」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 7月9日 一緒に考えましょう講座 宍戸仙助(認定NPO法人アジア教育友好協会)「国際理解と『災後』の教育」
- 7月12日 センタープロジェクト型公募研究・報告会 長與進(早稲田大)「方言と独立言語の狭間で：東部スロバキア『文章語』の試みを例として」；下里俊行(上越教育大)「近代ロシア・プラトニズムに関する学際的研究」；永山ゆかり(北大・文)「北東アジア先住民の民族誌再評価」；長縄宣博(センター)「戦間期の国際秩序形成におけるソ連の役割：中央アジアと中東との関係から」
- 7月21日 Bосya Kornusova(カルムイク国立大、ロシア)“Minority Language Survival in the Globalized World: The Kalmyk Experience”(SRCセミナー)
- 7月23日 ヨフコバ四位・エレオノラ(東京大)「ブルガリア人のユーモア」(北海道スラブ研究会)スラブ・ユーラシア研究センター中・東欧研究会 Scott Spector(ミシガン大、米国)“Scholarly Paradigms for the German-Jewish Literature of Eastern Europe”
- 8月10日 Laada Bilaniuk(ワシントン大、米国)“The Martial Art of Nonstandard Language: ‘Boyovyj Surzhyk’ in the Construction of Ukrainian Identity”(SRCセミナー)孫柏(中国人民大)「『無声の中国』：1930年代の中国映画におけるネーション、ジェンダーと声の主体性(中国語)」(センター特別講演会)
- 8月13日 Paul Wexler(テルアビブ大、イスラエル)“How Yiddish and Romani Can Contribute to Slavic and German Historical Linguistics?”(SRCセミナー)
- 8月27日 UBRJセミナー「ロシア極東：中国との統合か、アジア太平洋との統合か？」 Artyom Lukin(極東連邦大、ロシア)“The Russian Far East: Integrating with China or the Asia-Pacific?”

人事の動き

◆ 学術研究員紹介 ◆

後藤 正憲 2015年5月に着任

研究テーマ：文化人類学、宗教および科学的認知と実践

[事務係]

ICCEES IX 幕張大会参加記：国際会議でのパネル組織の楽しさ

地田徹朗(センター／境界研究ユニット・助教)

2011年4月1日にグローバルCOEプログラム(以下、「GCOE」)学術研究員として着任してから私のスラブ・ユーラシア研究センターでの勤務歴は4年を超えている。GCOE時代は日々鍛錬。センターに来てからの英語・ロシア語での研究報告は10回を数え、助教になった今日まで様々な経験を積ませていただいた。センターでは、日々、職務で英語・ロシア語

を使う機会があり、日本語はもちろん外国語でのセミナーの数も多い。今回の ICCEES IX 幕張大会でのパネル組織は、これまでスラブ・ユーラシア研究センターで取り組んできたことの延長線上にある。正直、人づきあいは得意なほうではない。いや、一見得意そうに見られがちなのだが、人間関係が長続きしない。ただ、センターでは日本人・外国人を問わず様々な人と否応なく接しなければならない。学会や調査などで外国にも頻繁に出向く。そして、センターにも人



パネルで報告するポリソヴァさん

が来てくれる。英語で報告をしたり、論文を書いたり、外国から研究者を招待したり、どれもそれほど高い壁ではなくなっていた。センターには本当に研究者として育てていただいた。

国際学会・会議でパネルセッションを組織することは簡単そうで難しい。ただ、やってみると楽しい。ICCEES IX に向けて準備を始めたのは昨年5月。私が所属する境界研究ユニット (UBRJ) リーダーの岩下明裕先生との話し合いで、先生の科研費から外国人研究者を招待する旅費支弁の許可が下りた。本当にありがたいお話だった。ICCEES IX でのパネルは多国籍であることが条件の一つである。そこで、私はロシアから2名の研究者を報告者として招待することにした。2012年1月にアルマトゥで出会って以来、年に一度合同でアラル海地域のフィールド調査を行っているニコライ・アラディン博士 (ロシア科学アカデミー動物学研究所) と、2013年3月にモスクワで知り合った中央アジア地域の水・エネルギー問題や国際関係を専門とするエカチェリーナ・ポリソヴァさん (ロシア科学アカデミー東洋学研究所) の2名だ。パネルのタイトルを「Border & Eurasia II: The Aral Sea Crisis and (Trans)Border Issues」とし、パネルのコンセプトを決め、アラル海問題研究の学際性を強調する趣旨説明を書き、両名に参加を打診した。すぐに快諾する返事をいただき、英語でのアブストラクトもすぐに書いていただいた。次は、司会者と討論者決めだ。アラディン先生は、アラル海救済運動をベレストロイカの時期から先導してきたことで世界的に著名な方だが、本来の彼の専門は汽水域生物学、つまり、理系の研究者である。そもそも、環境の問題を考えるには文理融合型アプローチが必要だと常々考えてきたし、折に触れて公言してききた。そこで、水文学を専門とする川端良子先生 (東京農工大学) に友人を通じて司会者を打診することにし、快諾していただいた。川端先生は長年ウズベキスタン領でアラル海周辺地域の調査を続けている方だ。討論者はどうするか。環境経済学が専門の片山博文先生 (桜美林大学) をお願いした。片山先生とは、過去に中央アジアに関する共著執筆で一緒にさせていただいたことがあった。かくして、パネルの陣容は固まり、プロポーサルの申請までは至極スムーズに事が進んだ。

その後、ようやく大会に向けて動き出したのが今年の5月。岩下先生のご提案により、大会の直後に九州大学でボーダースタディーズセミナーを開催することになり、大会前に札幌でセミナー開催してもよいとの許可をいただいた。なかなか厄介だったのがロシア人2名の航空券とホテルの手配である。詳しい事情はプライベートなことなので割愛するが、これだけで数日を要した。何とか日程・旅程を調整してアラディン先生 (と奥様、息子さん)、そしてポリソヴァさんの航空券とホテルを手配できた。複数の外国人を日本に招待する場合の



積丹町にてアラディン先生一家と（右端が筆者）

and the Resurrection of The Small Aral」と題してセミナーを開いた。8月2日は打ち合わせの後、エクスカーションというわけではないが積丹半島の島武意海岸まで一家をお連れした。3日に新千歳から羽田に移動し、市川妙典に予約したホテルでポリソヴァさんと落ち合った。初来日のポリソヴァさんには成田空港からホテルまでの行き方を事前に丁寧に説明しておいた。

いよいよ4日から ICCEES 本体の会議に突入である。アラディン先生、ポリソヴァさん、同じホテルに宿泊していたサクトペテルグのグゼリ・サビロヴァさん（ロシア国立研究大学高等経済学院）と共に地下鉄、JR、バスを乗り継ぎ会場の神田外国語大学へ。私は最初のセッション「Problems of Identity in the Multinational Soviet Union」で司会者を割り当てられていた。司会者はさすがにもう慣れていて、無難にこなすことができた。イザベラ・カブランさん（ジョージタウン大学）による、アゼルバイジャンを例にとったスターリン時代の共和国「文化旬間」についてのペーパー／報告は非常に面白かった。

国際学会や会議はいつも日本人・外国人問わず友人や知人との再会の場となる。初日のレセプションでは数多くの知人・友人と談笑した。それ以外にも、かつてセンターに学振外国人研究員として滞在していたベアトリーチェ・ベナティさん（ナザルバエフ大、カザフスタン）、昨年度の夏期国際シンポジウムで来札し、今は私と同様アラル海環境史に取り組んでいるニコロ・ピヤンチオラさん（嶺南大学、香港）、ケンブリッジ大でのBASEES 年次大会に参加した時にセッションをコーディネートしてもらったソ連地理学史のジョナサン・オールドフィールド先生（バーミンガム大学）などと旧交を温めることができた。新たな出会いもあった。

大会5日目、7日はいよいよ我々のパネルの出番である。我々の前の岩下明裕・UBRJ ユニトリリーダーが組織した「Border & Eurasia I」パネルが満席かつ非常な盛り上がりを見せており、ややプレッシャーだったが、我々のパネルにも15名程度の来場があり、文理融合型というパネルの特殊性を考えれば上々である。トップバッターのアラディン先生にはアラル海問題と大小アラル海の救済をめぐるこれまでの動きについて越境環境協力の現状を踏まえつつ包括的な報告をしていただいた。ポリソヴァさんは、専門である水資源・エネルギー問題についてこれまでの経緯と今後の課題について報告をした。私は、アラル海災害が顕在化しつつあった時期のソ連／カザフスタン当局による初期緩和策について水利行政の中央・共和国関係を踏まえながらまとめた。片山先生からは全ての報告についての示唆的なコメントをいただき、私のペーパーに対しては会議後にも追加でコメントをしていただいた。司会を快諾して

難しさはサブスタンスよりもロジスティクスな問題のほうが多い。もっとも、これは誰を招待するのにもよるのだろうが・・・

私のペーパー提出は遅れたが、それでも形だけは整えてパネルメンバーに渡すことができた。7月29日から31日までのセンター夏期国際シンポジウムの直後に8月3日から8日までの ICCEES に突入というハードな日程であり、しかも、その間にアラディン先生（一家）を札幌に招いて8月1日にセンターで「Visualizing the Aral Sea Crisis

いただいた川端先生を含め心より感謝申し上げる。パネル全体として若干冗長的なところもあったが、越境環境問題であるアラル海問題のこれまでと今後について真剣に考える場にはなったと思う。

午後、私はセンターで同僚の金山浩司さん組織のパネル「『The General Scientific Staff': From the History of the USSR Academy of Sciences」で討論者を務めさせていただいた。1930年代後半の大テロルのソ連科学アカデミーへの影響について論じた金山さんのペーパー、ヴラジーミル・ヴェルナツキーとヴラジーミル・イパチエフという二人の十月革命前後を生きた科学者のバイオグラフィーを扱った梶雅範先生（東京工業大学）のペーパー、フルシチョフ時代ソ連における放射線生物学の発展とルイセンコ学派との関係性について論じた市川浩先生（広島大学）のペーパーという3本である。私の他にソ連科学史の大家であるアレクセイ・コジェブニコフ先生（ブリティッシュ・コロンビア大）も討論者として招かれており、あまり難しく考えないで、3本のペーパーに通底するシンプルな質問をすることにした。事前原稿を用意する余裕がなかったので、ぶっつけ本番でよどみなく英語が出てきたのは収穫だった。

晩は海浜幕張駅前の中華料理屋でパネルの打ち上げである。川端先生の他に、長年お世話になっている窪田順平先生（総合地球環境学研究所）にも加わっていただき、アラディン先生とご長男のイヴァン君も参加する9月のウズベキスタン調査について打ち合わせをすることもできた。川端先生にイヴァン君を引き合わせることもできた。国際学会や会議でのパネル組織は今後の共同調査や研究協力について打ち合わせるにも格好の機会である。

翌8日、ICCEES最終日午前中のセッションまで出席し、夜はゆりかもめの先頭車両から東京湾花火大会を見物するという荒業をやり、9日朝には福岡に向けて出発した。博多駅至近のホテルに荷物を置いた後、急いで昼食をとり、タクシーでセミナー会場の九州大学箱崎キャンパスへ移動。セミナーは九州大学アジア太平洋未来研究センターとUBRJが主催で、「The 3rd Asia-Pacific Border Studies Seminar: Lessons from European



九大セミナーで報告するアラディン先生

and Central Asian Borders for Asia-Pacific Future Studies」と題された。我々のセッションは東フィンランド大学の境界研究のスペシャリスト2名の後で、アラディン先生とポリソヴァさんの幕張での報告と同じものに対して今度は私がコメントをするという段取りだった。今回はコメント用の手書きのメモを用意しておいた。札幌での夏期国際シンポジウムからずっと英語漬けだったため慣れたのか、ここでも慌てることなく、そしてメモを読み上げることなく、2人の報告に対してコメントすることができた。中央ユーラシア、そして環境問題という境界研究ではマージナルな地域・テーマではあったが、議論は盛り上がりを見せ、アラル海問題の重要性と研究の面白さをアピールすることができたと思う。

翌10日、朝ポリソヴァさんを福岡空港まで見送り、アラディン先生とイヴァン君のウズベキスタンでの共同調査について最終打ち合わせをし、別府まで車を飛ばして大分・佐伯に住む私の妻と長男を招いてランチ会を開いた。妻もロシア語を話すのでランチはとても楽しいものとなった。将来は3人でサンクトペテルブルグを訪れて家族ぐるみの交流を続けたいと

思う。夕方にかけて海水浴を楽しんでもらい、一路高速で福岡に戻った。翌朝、アラディン先生一行を福岡空港に見送った。「生物学者である自分にとってこのような人文・社会系の会議への出席は初めてだったが、自分の知的関心も広いし、非常によい経験だった」と言っていたのは本当に嬉しかった。

かくして、昨年5月から準備を始めた ICCEES IX 幕張大会およびその前後企画のすべての行程を終了した。私のケースは特殊なのかもしれないが、準備段階での調整はそれなりに大変で、10日間以上パネルメンバーと行動を共にするのは体力的にも精神的にも決して楽ではなかった。しかし、終わってみるといい思い出ばかりである。アラディン先生との共同調査を今後とも続けてゆく上でお互いを深く知るよい機会となったし、ポリソヴァさんとも今後科研費プロジェクトなどで共同研究ができればという話になった。国際会議でのパネル組織は楽しいものである。ただし、資金は要る。旅費支弁をしてくださり、貴重な経験の機会を与えていただいた岩下明裕先生には心から感謝をしたい。

私は今年で38歳になる。もう「若手」ではなく「中堅」世代に差し掛かっている。こんなエッセイを書くこと自体が恥ずかしいことである。もっと若くてもっとアクティブに動いている若手研究者は数多い。とはいえ、私にとってはセンターでの経験は大きなもので、ここからこそ自分でパネルを組織しようという気になれたのは疑いなき事実である。だから敢えてこのエッセイを書いたし、敢えて言わせていただきたい。若いスラブ・ユーラシア研究者の皆さん、センターでの公募（非常勤研究員、助教など）にどんどん応募していただいて、ここでしかできない貴重な経験をぜひ積んでください。

◆ ズビグニェフ・グレン教授（ワルシャワ大学）講演会について ◆

センターニュース前号（141号）に報告がありますように、グレン教授は北海道大学とワルシャワ大学の協定に関連して来日され、東京（3月27日、於：駐日ポーランド共和国大使館）と札幌（3月29日、於：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）で2回の講演会をおこないました。『現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成：シロンスクを題材に』と題された東京での講演会は大変盛況となり、講演後に複数の方から講演原稿の刊行予定についてお問い合わせをいただきました。これに鑑みまして、講演原稿を連載という形でセンターニュースに掲載することにいたしました。今号を含めて3回を予定しています。講演原稿はポーランド語でしたが、当日通訳を担当された久山宏一先生（ポーランド広報文化センター）が訳文をご準備くださいました。この場をお借りして、久山先生にお礼申し上げます。[野町]

現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成：シロンスクを題材に（1）

ズビグニェフ・グレン（ワルシャワ大学、ポーランド）

私は、この講演の冒頭に、アイデンティティなるものは——特に言語文化的な境界領域、エスニック的に混淆した領域において、人間関係を定義する道具として機能的に扱われる、と申し上げておきたいと思います。社会グループの間関係を表すのに、このアイデンティティを構成するさまざまな側面（カテゴリー的特徴）が用いられるのです。アイデンティティとは、概念のある種の構築物だからです。

アイデンティティが概念の構築物であるというならば、私たちはまず、当のアイデンティ

ティ^①とは何か、私たちはそれをどのように理解しているか、を明確にしておかなくてはなりません。

アイデンティティには多くの捉え方がありますが、それらを定義する試みも多くありますが、私たちにとって最もわかりやすいのは、ジョン・ターナー〔John Turner (1947-2011)〕。英国の社会心理学者—訳註〕によるもので、彼はアイデンティティの心理的・社会的あり方（と機能）という側面を考慮に入れています。彼はアイデンティティのレベルを、Ⅰ：私＝人間、Ⅱ：私＝社会的存在、Ⅲ：私＝個人の3つに分類しますが、それらにおける機能的な側面を考慮に入れることで、アイデンティティの十全な（歴史的な）把握が可能になると思われます。



センター図書館を訪問したグレン氏

アイデンティティ証明の一つとしての言語の観点から、なによりも重要なのは、概念化の社会的レベルです——すなわち、「私」は社会的存在であり、グループのアイデンティティを作り出し、機能させるメカニズムであると捉えることです。

私はグループのアイデンティティについて話しておりますが、社会的存在としての「私」というレベルにおける、社会的な多様性のすべてを考慮に入れると、エスニック性は個人またはグループのアイデンティティを構築するたった一つ概念ではないということ、エスニック・グループは社会を組織する唯一の方法ではないということが明らかになるでしょう。エスニック・アイデンティティについていうならば、エスニック性とは何であるかを知るには（すなわち、それを認識の道具とするには）、私たちは、それ以外にもあり得るグループ・アイデンティティのレベル——宗教、階級、地域、近隣、家族など——も考慮に入れなくてはなりません。それによって、エスニックな面におけるアイデンティティの移動、変化、誕生と死滅のプロセス、すなわちアイデンティティの運動を容易に発見できるようになると考えられます。エスニック・グループという面だけを考慮に入れることが、このプロセスを然るべく説明する可能性を与えてくれるわけではありません。

個人とグループのアイデンティティを動的に理解する根拠は、個人とグループはそれぞれ、一定の場所と時（一定の状況）に応じて、多くのグループへの帰属を示す、または帰属を実現できるということです。個人とグループは、それを次のような、多様なやり方で行っています。

—ターナーによる3つの概念の間だけでなく、2番目の社会的カテゴリーの枠内での、包含関係の原則によって。これは、相互に包含するさまざまなグループに所属することを意味します——クラクフ市の住人であり、マウォポスルカ地方の住人であり、ポーランド国の人であること。

—相互に共通部分を持つ分布におけるさまざまなグループへの帰属によって。例えば、アメリカのポーランド社会の構成員における、ポーランド人としてのまたはアメリカ人としてのアイデンティティや、国際結婚から生まれた子どもの二重のエスニック・アイデンティティ。

ここでさらに考慮に入れなくてはならないのは、アイデンティティの意識は時代によって変わる可能性があるということ、つまり、新たに生まれつつある概念への移行（例えば、マケドニア系ブルガリア人→マケドニア人、シロンスク系ポーランド人→シロンスク人）、また

注1 関係文献の中では、アイデンティティ（個人的・グループ的構造）と自己同一化／自己同一性（社会的「能力」）を区別して用いられているが、本論において著者が関心を持つのは、第一の概念である。



在日ポーランド共和国大使館でのグレン氏の講演の様子

は死滅しつつある概念からの離脱（たとえば、ラウジツ〔現在のドイツ東部、ブランデンブルク州南部からザクセン州東部にかけての歴史的地名〕人のグループや母国国境の外にいる少数エスニック・グループにおける、所謂、民族性の剥奪）です。

これまでに述べたさまざまな前提から、研究と方法論に関する一定の結論を導き出すことができます。ここで私は、シロンスクにおけるポーランドとチェコの境界領域、特にシロンスクのチェシンで行った研究の経験を念頭に置いています。

研究者の観点から大切なのは、社会的事実のうち分析される根幹部分に対しては、それに合った研究手段を用いなければならないということです。すなわち、アイデンティティの領域におけるさまざまな現象とメカニズムの分析に着手するに際しては、多レベルにおいて、さまざまな特徴を有する多アイデンティティを許容しなければならないのです（例えば、グループと個人が単一要素から成るアイデンティティを持っているなどと、演繹的に前提してはならないのです）。研究方法もまた、これらの可能性をすべて考慮に入れるものでなくてはなりません。結果として私たちは、個人とグループが多アイデンティティ的であること、そして、アイデンティティとその特徴を感受することが段階的であることの指標を受け取りますが、私たちはそれを受け容れる（しかし、前提はしない）ことが必要です。二番目に挙げた「段階性」は、アイデンティティの領域におけるさまざまな現象の動的な特徴を自覚した結果です。

こうした前提が際立って重要になるのは、研究の対象となるのが、エスニック的・言語的・文化的な境界領域のグループである場合です。これらのグループは、これらの領域のそれぞれにおいて、選択可能なアイデンティティを持っているからです。選択肢（必ずしも常にとりうる訳ではありませんが、それらは相互に競争関係に置かれています）を持つという条件の下で現実にはどのような選択を行っているかを知ることが、選択の可能性または組み合わせの可能性のどれ一つとして、あらかじめ演繹的に排除しない場合のみ、可能になるはずですが。

従って、解釈がこのような開かれていることを十分に示すのは、同じく開かれた方法で集められた材料の集合である——例えば、さまざまなタイプの人物からの聞き取り、オリジナル・テキストの豊富な蓄積、自由記述式のアンケートなど——ように思われるのです。

このような方法論の正当さは、それが研究にどう反映するかによって確認されました。

グループへの帰属意識が開かれていて段階的である、エスニック的・宗教的なカテゴリー化を演繹的に押しつけないという原則は、ザオルジェ〔シロンスク・チェシンの俗称——「オルザ川の向こう」の意〕のポーランドとチェコの境界領域での研究に用いられ、それは、ポーランドとシロンスク、ポーランドとグラル〔山の民〕、ポーランドとシロンスクとグラル、あるいはザオルジェのポーランド人学校生徒においては、ポーランドとチェコ（そこに、シロンスクとグラルが加わることもあります）といった自己同一性が同時に現れることを示しました。それは、ザオルジェの人々がインターネットで行うエスニック的・宗教的テーマについての議論などの資料においても証明されましたが、その際、チェコ人であると同時に地

域住民でもあるという自己同一性の組み合わせ——チェコのザオルジェ人、シロンスクのチェコ系グラル——も出てくるのです。

と同時に、こうした帰属意識が段階的に変化する可能性を持つことは、地域的・エスニック的な価値観の階層化されたシステムを明るみに出しました。

—伝統的なシステム、すなわち、大祖国よりも地域を特権化する

—「現代的な」システム、すなわち、順序は上の反対。

伝統的なシステムは、シロンスクという新しいエスニック・アイデンティティが現れたときに、その申し出すなわち上シロンスクという法的立場を受け容れるのを助けます。同様にそれを助けるのは、地域が特権化されたこの伝統的なシステムにおける個人（グループ）が民族のレベルを除外する、または民族のレベルが極めて弱い（チェコ、ポーランド、ドイツ）場合ですが、それは自由記述式のアンケートやインターネットでの議論でも確認されました。

こうした開かれた捉え方の対極にあるのが、例えば、以前（2011年以前）に行われていた、エスニック的なカテゴリーを一つだけ選ぶことを前提としたポーランド国勢調査だったのです。

これまでに申し述べたことを要約しましょう。私たちは、研究素材の入手において最大限に自由であることによって、現象のすべての豊かさ（その分、カテゴリー化するのが困難になりはしますが）とすべてのダイナミズムを発見することができると考えています。このダイナミズムは、アイデンティティ概念における変化とこうした変化において指標が果たしている役割を説明してくれます。それ故に、例えばポーランドとチェコへの並行的なアイデンティティを考慮に入れることは、エスニック意識が「転向」するメカニズムに光を当てるのです。

アイデンティティのさまざまなレベル、すなわち民族だけでなく、地域（地方、隣接）、さらにはそれらの間の関係を考慮に入れることは、シロンスクという新しいエスニック・アイデンティティ、そしてシロンスクという新しいエスニック・グループが生まれるプロセスを明らかにします。（ポーランド語から訳：久山宏一氏訳）

学 界 短 信

◆ ソビエト史研究会 2015 年度年次研究大会が開催される ◆

6月13日（土）、センターの後援でソビエト史研究会 2015 年度年次研究大会が専修大学サテライトキャンパスで開催されました。ソビエト史研究会は一昨年度から事務局が一新し、これまでの例会中心の研究会運営から、メーリングリストでの意見・情報交換と共に、年に一度研究大会を開催するという方針に変更し、今年で2回目の研究大会開催となります。地田徹朗・センター助教を中心にプログラム作成をおこない、センター客員准教授の日臺健雄（埼玉学園大）が運営・会計を担当。北大大学院文学研究科スラブ社会文化論専修修士課程修了の千葉信人（防衛省）とセンター助教の高橋沙奈美がそれぞれ若手報告・自由論題の枠で報告をおこないました。大会後半には、2017年に岩波書店から刊行が予定されている5巻本の論集『ロシア革命とソ連の世紀』の編者が一堂に会し、各巻の概要に照らして自らの考えを披瀝して議論するパネルセッションが開かれ、編者の一人である宇山智彦・センター教授が報告をおこないました。センターに後援をしていただき、広報面での便宜をはかっていただいたというだけでなく、センター関係者が強くコミットする大会となりました。また、内

容面でも、若手3名の充実した報告と共に、パネルセッションは我が国のソビエト史研究の今後を考える上でも重要な機会となったと思います。大会プログラムは以下のとおりです。

若手報告「1920-30年代ソヴィエト・カレリアにおけるフィンランド系移民政策」

報告者：千葉信人（防衛省）

司会：地田徹朗（センター）

自由論題①「汚れと粛清：コロンタイの1920年代のテキストにみられる党批判」

報告者：北井聡子（東京大学・院）

司会：油本真理（立教大学）

自由論題②「ペテルブルグの福者（ブラージェンナヤ）クセーニヤ：反宗教政策とソヴィエト的「民衆宗教」としての「聖人」崇敬」

報告者：高橋沙奈美（北海道大学）

司会：池田嘉郎（東京大学）

パネルセッション「ロシア革命とソ連の世紀」

趣旨説明 松戸清裕（北海学園大学）

報告

「世界戦争から革命へ」 池田嘉郎（東京大学）

「スターリニズムという文明」 松井康浩（九州大学）

「冷戦と平和共存」 松戸清裕（北海学園大学）

「社会主義革命と社会、学知、文化」 浅岡善治（東北大学）

「帝國的プロセスとしてのロシア・ソ連史」 宇山智彦（北海道大学）

大会後の懇親会も非常に盛り上がり、コンパクトだが和気藹々とし、ソビエト史について中身の濃い議論をする場としての伝統的なソビエト史研究会の特徴は今なお維持されています。今後は、当面は岩波論集企画とも連動しながら例会を開くとともに、年に一度の研究大会も継続してゆきたいと考えています。[地田]

◆ 学会カレンダー ◆

2015年

10月30日-11月1日 日本国際政治学会2015年度研究大会 於仙台国際センター

http://jair.or.jp/index_j.html

10月31日 内陸アジア史学会2015年度大会 於京都外国語大学

<http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/>

10月31日-11月1日 地域研究コンソーシアム年次集会 於東京外語大学

11月7-8日 日本ロシア文学会第65回定例総会・研究発表会 於埼玉大学

<http://yaar.jpn.org/>

比較経済体制学会全国大会 於日本大学 <http://www.jaces.info/info.html>

11月19-22日 ASEES（スラブ東欧ユーラシア学会）第47回年次大会 於フィラデルフィア市

<http://www.aseees.org>

11月28日 ロシア・東欧学会2015年度研究大会 於上智大学 <http://www.gakkai.ac/roto/>

12月10-11日 スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム（兼センター設立60周年記念行事）

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ 目録に「スラブコレクション」の表示 ◆

北海道大学附属図書館の本館の耐震改修にともなう「再生事業」（2009～2012年）と、それに伴う資料配置の変更については、これまで122号（2010年8月）および126号（2011年

8月)などでお知らせしてきましたが、これによって、それまで「スラブ・コレクション」として東書庫1Fにまとめられていた資料のうち、欧文図書は4Fの「本館・書庫・洋書」に統合・混排され、欧文・露文の雑誌類は、新館1Fの自動化書庫に、他の雑誌と一緒に配置されることになりました。

これまで「スラブ・コレクション」としてまとめて配置されてきた資料が分散することから、センターではその対策について附属図書館と協議し、従来の「スラブ・コレクション」に該当する資料に関して、目録のコメント欄に「SLV (スラブコレクション)」と記すことになっていました。その後、時間がかかりましたが、この春に目録の整備が完了しましたのでお知らせします。

なお、目録検索時に、slvで検索すると、「スラブ・コレクション」だけのグループがつかられ、一種の仮想コレクションとしてデータを取り出すことができる仕組みになっています。[兔内]

◆ 日本サハリン協会所蔵資料の一部移管 ◆

日本サハリン協会は、サハリン残留日本人の支援活動をおこなうNPO法人です。協会はその前身「日本サハリン同胞交流協会」から、ソ連統治下の南サハリンで作成されたサハリンからの日本人引揚者乗船名簿、その他サハリンの公文書館の所蔵する、敗戦直後に作成された日本人の状況に関する文書類の写しを引き継いでいましたが、最近、これら文書のデジタル化をおこなったことなどから、これら文書を保管する必要がなくなったということで、センター図書室がその移管を受けましたことをお知らせします。

図書室では、現在、その公開のルールについて検討しており、今後トラブルなく有効に活用されるように整備したいと考えています。[兔内]

編集室だより

◆ Acta Slavica Iaponica ◆

2015年7月15日締切の37号への投稿は、論文・書評合わせて19本になっています。多くの論考が掲載に至るように願っています。なお、以前試験的におこなった年複数号刊について、現在再検討中ですが、次号の締め切りは2016年7月15日となっています。どうぞふってご投稿ください。[野町]

◆ Slavic Eurasian Studies 29 ◆

Transboundary Symbiosis over the Danube: II の刊行

Transboundary Symbiosis over the Danube (Part II): Road to a Multidimensional Ethnic Symbiosis in the Mid-Danube Region (Eds., Osamu Ieda and Susumu Nagayo) が刊行されました。本論文集は、2014年9月12日にスロヴァキアのコマルノ市のシェイエ・ヤーノシュ大学で開催された国際会議 International Conference at the University of Selye János titled Transboundary Symbiosis over the Danube: EU Integration between Slovakia and Hungary from a Local Border Perspective (Part II) の成果論文集です。この国際会議は、シェイエ大学と科研費研究「多層的な民族共生への道：ドナウ中流域とEU統合」(長興進研究代表、2013～2018年)の共催で開かれたものです。

論文は「歴史学、歴史、言説」を扱った第一部と、「国勢調査、統計、アイデンティティ」を論じた第二部からなります。目次は以下の通り。

I. Historiography, History, Discourse

- Dušan Kováč Slovak National Narrative and Hungarian National Narrative as a Part of the Slovak-Hungarian Socio-political Discourse
- Štefan Šutaj Slovak and Hungarian History: The Subject of Common Views and Confrontations of Historians
- Gabriela Dudeková Controversial Interpretations: Controversial Past? Some Cases from the Slovak-Hungarian History and Historiography
- Susumu Nagayo When Did Bratislava Become Bratislava? A Reflection on the Name of a City in the Borderlands (Part II)
- Barnabás Vajda The Malta Meeting and Eastern Europe in 1989: How Were They Presented by the Media Propaganda in Czechoslovakia?

II. Census, Statistics, Identity

- Osamu Ieda What Do the National Censuses of 2001 and 2011 Say about Ethnic Minorities? An Introduction to a Study on the Slovaks in Hungary
- Tadaki Iio Social Capital and Religion in Slovakia: Its Perspective for Symbiosis between Slovakia and Hungary
- Tatsuya Nakazawa Boundary Mechanisms in the Formulation of National Identity: A Case Study of Students in the Slovak Department at Selye János University
- Eva Győriová Baková The Language Situation in Komárno
- Yuko Kambara Ethnic Symbiosis: Spolužitie on the Way to a Democratic State: Perspectives regarding "Ethnic Conflict" by Hungarian Minority Elites in Southern Slovakia

本論文集は2014年に出版されたSES 27号 *Transboundary Symbiosis over the Danube: EU Integration between Slovakia and Hungary from a Local Border Perspective* の後続版で、現地との共同研究は現在も継続中。2016年9月に予定されている3回目の国際会議の成果についてもSESで出版を企画しているところです。[家田]

誰が何をどこで

2014年度(4~3月)の専任研究員・助教・客員教授・非常勤研究員の研究成果、研究余滴のアンケート調査(提出は任意)を以下のようにまとめました。[五十音順][大須賀]

家田修 ㊦ 2その他業績(論文形式) (5)その他 ▼世界動かす1・11パリの精神『北海道新聞』(2015.1.23)
▼(インタビュー記事)家田修スラブ・ユーラシア研究センター長『U7』60:10-19 (2015.3) ㊦ 4その他業績(冊子) ▼(監修)『飯館村綿津見神社例大祭』34 (SRC, 2014) ㊦ 3著書 ▼『なぜ日本の災害復興は進まないのか: ハンガリー赤泥流出事故の復興政策に学ぶ』255 (現代人文社, 2014) ㊦ 5学会報告・学術講演 ▼Radioactive Risk Communication or Civil Protection in a case of Fukushima Daiichi Disaster, IV. Terrestrial Radionuclides in Environment, International Conference on Environmental Protection, Institute of Radiochemistry and Radioecology, University of Pannonia, Veszprém, Hungary (2014.5.23) ▼Radioactive Exposure: Alternative comparison of Fukushima and Chernobyl', IX. Japanese-Thai Seminar, SRC (2014.7.13) ▼Slovaks in Hungary: Is the Future Really Pessimistic? What Does the Census Say in 2001 and 2011?, International Workshop on Transboundary Symbiosis over the Danube: EU Integration between Slovakia and Hungary from a Local Border Perspective (Part II), Selye University, Slovakia (2014.9.11)

岩下明裕 ㊦ 3著書 ▼(編著)『領土という病』250(北海道大学出版会, 2014) ▼(花松泰倫他と編著)『国境の島・対馬の観光を創る』[ブックレット・ボーダーズ1] 64(国境地域研究センター&北海道大学出版会, 2014) ㊦ 4その他業績(著書形式) ▼(全て古川浩司と)日本初の国境観光を創る・対馬の挑戦『JIBSNレポート』8; 日本初の国境観光を創る: 北海道・稚内の挑戦『JIBSNレポート』9; JIBSN 竹富セミナー2014『JIBSNレポート』10 (JIBSN, 2014-15) ㊦ 5学会報告・学術講演 ▼Visualizing Borders: Tale of the Shaken National Border: Okinawa as Japan's Crossroad Islands with the US and China, ABS大会, アーバカーキー (2014.4.3-5) ▼Constructed Territories: Featuring a Fantasy of East Asian Border

Disputes, 平和統一研究院シンポジウム, ソウル大学 (2014.4.16-17) ▼ Russian-Japanese Relations Seen through Arctic Cooperation, アレクサンテリ研究所, ヘルシンキ (2014.6.6) ▼ Russian Foreign Policy and Its Eastern Borderlands, ABS 世界大会, ヨエンスー&サンクトペテルブルグ (2014.6.9-13) ▼ 基調講演 & Comparative Studies on Tourism beyond the Border, BRIT 第14回大会, アラス、リール&モンス (2014.11.4-7)

岩本和久 ㊦ 1 学術論文 ▼ 『アンナ・カレーニナ』のスポーツ描写の諸相『SLAVISTIKA』30:67-74 (2015) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ 欠落とどう向き合うか? 現代ロシア文学の邦訳について『ロシア語ロシア文学研究』46:201-207 (2014) (5) その他 ▼ 現代ロシア文学とSFの想像力(越野剛編『ロシアSFの歴史と展望』[スラブ・ユーラシア研究報告集7]41-46, SRC, 2015) ▼ 証言から虚構へ(海外文学・文化2014回顧)『図書新聞』3187:5 (2014.12.20) ㊦ 4 その他業績 (事典項目) ▼ помещье から пятью までの項目を執筆(中澤英彦(編集主幹)『プログレッシブ ロシア語辞典』小学館, 2015)

宇山智彦 ㊦ 1 学術論文 ▼ 権威主義体制論の新展開に向けて: 旧ソ連地域研究からの視角(日本比較政治学会編『体制転換/非転換の比較政治』1-25, ミネルヴァ書房, 2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 変質するロシアがユーラシアに広げる不安: 進化する権威主義、迷走する「帝国」『現代思想』7月号:129-143 (2014) (5) その他 ▼ (エッセイ)「境界を越える人々」を通して見るロシア社会内の境界線: 中央アジア・カフカス労働移民の調査から『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』137:18-23 (2014) ▼ (インタビュー) 中央アジアの今を語る『しゃりばり』4月号:2-6 (2014) ㊦ 3 著書 ▼ (藤本透子と共編著)『カザフスタンを知るための60章』384 (明石書店, 2015) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Role of Slavic and Eurasian Studies in Comparative Area Studies in Japan: With a Focus on Muslim Central Eurasia, 第6回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンス, 韓国外国語大学 (2014.6.27) ▼ Kazakh Intellectuals' Views on the West and the East, Wars and Civilizations in the 1910s, スラブ・ユーラシア研究センター2014年度夏期国際シンポジウム「危機の30年: 第一次~第二次世界大戦期ユーラシアにおける帝国・暴力・イデオロギー」, SRC (2014.7.10) ▼ クリミア後の世界秩序と紛争: 帝国論の応用から考える, 日本国際政治学会2014年度研究大会共通論題, 福岡国際会議場 (2014.11.15) ▼ Dilemma of Nationalism and Regional Integration after Crimea: Focusing on Central Asia, 北海道大学・ブレイメン大学合同ワークショップ「社会主義後期以降のロシアと中央アジアにおける宗教とナショナリズム」, ブレイメン大学 (2014.12.1) ▼ Cultural Encounters and National Movements in Early Twentieth-Century Central Asia: Kazakh Intellectuals, Islam, and Russia, ロシア・アジア研究セミナー, ミュンヘン大学 (2014.12.2)

金山浩司 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ ソ連の物理学とイデオロギー『科学史研究』272:103-110 (2015) (3) 書評 ▼ 西原稔、安生健著『アインシュタインとヴァイオリン: 音楽の中の科学』(ヤマハミュージックメディア, 2013年)『科学史研究』271:359-360 (2014) (4) 翻訳 ▼ イリーナ・グーゼヴィチ、ドミトリー・グーゼヴィチ著「数学を導入し、帝国を建設する: ピョートル一世治下のロシア」(『Oxford 数学史』315-334, 共立出版, 2014) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ 戦後主体性論争再考: 技術論との連関から, 日本科学史学会, 酪農学園大学 (2014.5.24)

辛嶋博善 ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Migration and Sustaining the Pastoral Society: A Case Study of Hentii Aimag, Mongolia, The Conference of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014 with Japanese Society of Cultural Anthropology, 幕張メッセ (2014.5.16) ▼ Migration and Sustaining the Pastoral Society: A Case Study of Hentii Aimag, Mongolia, Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia, Ulaanbaatar University, Mongolia (2014.8.7) ▼ How to Sell Products: A Case Study on Market Economy for Mongolian Pastoralists, "Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia, Ulaanbaatar University, Mongolia (2014.8.9)

越野剛 ㊦ 1 学術論文 ▼ Illusion and Mirror: Image of China in Contemporary Russian Literature (Shinichiro Tabata, ed., *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia*, 205-221, Abingdon, Oxfordshire, UK: Routledge, 2015) ▼ ソ連80年代前半期の核戦争小説について(越野剛編『ロシアSFの歴史と展望』[スラブ・ユーラシア研究報告集7]19-26, SRC, 2015) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ スヴェトラーナ・アレクシエヴィチ: 「ユートピアの声」を集めて(『ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち』30-37, 青土社, 2014) (3) 書評 ▼ 亀田真澄著『国家建設のイコノグラフィ: ソ連とユーゴの五カ年計画プロパガンダ』(成文社, 2014年)『スラヴ学論集』18:140-145 (2015) (5) その他 ▼ 記憶の中の大祖国戦争: ロシアとベラルーシ, スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「記憶の中のユーラシア」, 北海道大学 (2014.6.2) ▼ ベラルーシ、存在しなかった国の文学史」, スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会, SRC (2014.10.8) ㊦ 3 著書 ▼ (編著)『ロシアSFの歴史と展望』[ス

ラブ・ユーラシア研究報告集7] 127 (SRC, 2015) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ Belarusian Literature Written in Russian: a Case of Belarusian Jewish Writer Grigory Reles, International Symposium “Images of East European Literature: The Variable and Invariable in the Past and Present,” 立教大学 (2014.9.28)

後藤正憲 1 学術論文 ▼ Не-предствление Волги в русских стихотворениях Геннадия Айги, *ЛИК Литературно-художественный журнал* 4:125-140 (2014) ㊦4 その他業績 (事典項目) ▼ マルクス主義と民族 (国立民族博物館編『世界民族百科事典』66-67, 丸善出版, 2014) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ 現代のロシア・チュヴァシ農村におけるアントレプレナーシップ, 日本文化人類学会第48回研究大会, 幕張 (2014.5.17) ▼ Village Entrepreneurship of Agricultural Agents in the Chuvash Republic, Russia, The 6th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 韓国外国語大学 (2014.6.27) ▼ Entrepreneurship of Economic Actors in a Chuvash Village in Russia, IIAS Conference, Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia, Ulaanbaatar University (2014.8.9) ▼ Не-предствление Волги в русских стихотворениях Айги, Международная научная конференция, Язык и языки поэзии, К 80-летию Г. Айги, Институт языкознания РАН, Moscow (2014.10.16)

佐々木史郎 ㊦1 学術論文 ▼ 北東アジア先住民族の歴史・文化表象：中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から『国立民族学博物館研究報告』39(3): 321-373 (2015) ▼ Способы охоты и охотничьи снаряжения у народов Сибири и Дальнего Востока (Шагланова Ольга А. и Сасаки Сиро (ред.) *Культурное наследие бурят, эвенков и семейских: предметы материальной и духовной культуры из коллекций Этнографического музея народов Забайкалья (Республика Бурятия, Россия)* [Senri Ethnological Reports 128] 89-111, 2015) ㊦2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ (加藤九祚との対談) 変わる国籍変らない人の絆：旧ソ連地域における収集『季刊民族学』150:73-77 (2014) ▼ 集めてみました世界の手袋『月刊みんぱく』39(2): 10-11 (2015) ㊦3 著書 ▼ 『シベリアで生命の暖かさを感じる』[フィールドワーク選書] 229 (臨川書店, 2015) ▼ (Шагланова Ольга А. と共編著) *Культурное наследие бурят, эвенков и семейских: предметы материальной и духовной культуры из коллекций Этнографического музея народов Забайкалья (Республика Бурятия, Россия)* [Senri Ethnological Reports 128] (国立民族学博物館, 2015) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ Commercial Hunting of the Indigenous People in the Russian Far East: The Change of Their Hunting Strategy and Techniques, Session P051 “Hunting, Animal Welfare, and Defense against Wildlife Attack” of IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences), Inter-Congress 2014, 幕張メッセ (2014.5.15-18)

佐藤隆広 ㊦1 学術論文 ▼ インド全国農村雇用保障法 (NREGA) の経済効果『国民経済雑誌』211(1):73-90 (2015) ▼ (Chiranjib Neogi and Atsuko Kamiike と共著) Factors behind the Performance of Pharmaceutical Industries in India, *Economic & Political Weekly*, XLIX(52):81-89 (2014) ▼ (Atsushi K. と共著) The Effect of Corruption on the Manufacturing Sector in India, *Economics of Governance*, 15(2):155-178 (2014) ▼ 「序章」, 「第1章 世界の中のインド経済」, 「(西尾圭一郎と共著) 第4章 金融システムと経済発展」, 「(石上悦朗, 上池あつ子と共著) 第6章 企業部門と経済発展」, 「第7章 土地市場」(絵所秀紀・佐藤隆広編『激動のインド 第3巻 経済成長のダイナミズム』1-11, 15-55, 161-234, 330-350, 351-389, 日本経済評論社, 2014) ㊦2 その他業績 (論文形式) (5) その他 ▼ モディ新政権の100日, 第71回開発協力ひろば (2014.11.8) ▼ Human Capital and Real Wage Rates in India: Evidences from “Regional” Panel Data, 第2回「アジア歴史空間情報システムによるグローバル・ヒストリーの新研究」研究会, 東京大学 (2014年10.5) ▼ インド進出日系企業に関する予備的考察：2013-14年アンケート調査を利用して, RIEB セミナー (科学研究費補助金 (基盤研究(B)) 「インドの産業発展と日系企業」共催) (2014.7.8) ▼ (司会) マハトマ・ガンディーとダライ・ラマの対話, 兼松セミナー, 神戸大学経済経営研究所 (2014.7.5) ▼ Productivity Dynamics and Rural Industrialization in India, 早稲田大学アジア太平洋研究センター (2014.6.13) ▼ 2014年インド総選挙を読み解く：少し違った角度から, JETRO セミナー, JETRO 本部 (2014.4.21) ▼ モディ新政権下のインド経済：新政権発足後の100日『Dua & Matsuda News』2:5-9 (2014) ▼ インド・モディ首相来日：目算外れた日本「関係強化」に温度差『週刊エコノミスト』12 (2014.9.16) ▼ 後発医薬品で躍進する製薬産業：第一三共が見逃した品質管理の罠『週刊エコノミスト』78-79 (2014.6.24. 特大号) ▼ インドで10年ぶり政権交代：経済改革に影差す民族主義の不安『週刊エコノミスト』84-85 (2014.6.3. 特大号) ㊦3 著書 ▼ (絵所秀紀と共編著) 『激動のインド 第3巻 経済成長のダイナミズム』400 (日本経済評論社, 2014) ㊦5 学会報告・学術講演 ▼ 選挙を通じてみる南アジアの政治社会変動：インドを中心にして, 日本南アジア学会第27回全国大会, 大東文化大学 (2014.9.28) ▼ Greasing the Wheel? International Conference on Economy of Tomorrow, Institute of Economic Growth in Collaboration with Friedrich-Ebert-Stiftung, Institute of Economic Growth, Delhi (2014.12.15) ▼ A Survey of the Japanese Firms in India, The Seventh Indo-Japanese Dialogue at

Japan Foundation, New Delhi (2014.12.23) ▼ The Internationalization of Japanese Firms and Industrial Dynamics in India, Presidency University, India (2015.1.6) ▼ Comparing Abeonomics and Modinomics: The Future of India-Japan Economic Relationship, India-Japan Dialogue, The Japan Foundation Lecture Series Part-II, The Japan Foundation, New Delhi (2015.1.9) ▼ The Internationalization of Japanese Firms and Industrial Dynamics in India, Centre for East Asian Studies, Jawaharlal Nehru University, India (2015.1.15) ▼ インド進出日系企業に関する予備的考察：2013-14年アンケート調査を利用して、2014年度国際経済学会関西支部研究会第5回、関西学院大学 (2015.1.31)

仙石学 ㊦ 1 学術論文 ▼ 第6章 中東欧諸国の現金給付制度：子ども手当と最低生活保障給付を軸に (宇佐見耕一、牧野久美子編『新興諸国の現金給付政策：アイデア・言説の視点から』[IDE-JETRO 研究叢書 No. 618] 197-227, アジア経済研究所, 2015) ▼ 分断から統合へ? : ポーランド西部国境における「分断された領域」のいま (坂井一成、岩本和子編『EU アイデンティティの構築とその政治的意義』[神戸大学大学院国際文化学研究科・異文化研究交流センター 2013 年度研究報告書] 11-19, 神戸大学国際文化学研究科異文化研究交流センター, 2014) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 中東欧諸国の年金制度の変遷『企業年金』34(3):32-35 (2015) ▼ 中東欧における現金給付制度：子ども手当と最低生活保障給付を軸に『アジア研ワールド・トレンド』229:29-33 (2014)

高橋沙奈美 ㊦ 1 学術論文 ▼ Russian Speakers in Latgale and “the Socialist Rituals” under Socialism (*Vēsture: avoti un cilvēki. XXIII zinātniskie lasījumi. Vēsture XVII*, 443-447, Daugavpils: Daugavpils Universitātes Akadēmiskais apgāds “Saule”, 2014) ▼ 無神論社会の中の宗教史博物館：ソヴィエト・ロシアにおける宗教研究についての一考察『宗教と社会』20:47-60 (2014) ▼ Канонизация и почитание современных святых в поздне- и постсоветской России (Аринина Е.И. (ред) *Церковь, государство и общество в истории России и православных стран: Религия, наука и образование*, 162-170, Владимир, 2014) ▼ (Noriko Maejima, Hiroshi Kobayashi と共著) UNESCO World Heritage in Regional Powers: Changing Representation of Cultural Heritage of Religious Interest (Shinichiro Tabata, ed., *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia*, 222-239, Abingdon, Oxfordshire, UK: Routledge, 2015) ㊦ 4 その他業績 (事典項目) ▼ Развитие социологии религии в Японии (Смирнова М.Ю. (ред.) *Энциклопедического словаря социологии религии*, СПб.: Издательство Русской христианской гуманитарной академии) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ The Prestige of Saints: Contemporary Saints in Post-Soviet Russia, 第6回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンス, 韓国外語大学 (2014.6.27-28) ▼ An Interpretation on Religious Art and the Andrei Rublev Museum in Late Socialist Russia, Interuniversity Exchange Seminar (Hokkaido University-University of Bremen), Bremen, Germany (2012.12.1-2) ▼ The Imagined Orthodoxy as Soviet Subculture: The Andrei Rublev Museum and an Interpretation of Religious Art in Late Socialist Moscow, Seminar in Europe University, St. Petersburg, Russia (2015.2.16) ▼ 重なりあうアイデンティティ：ラトガレ地方の古儀式派住民と社会主義の記憶, 第3回古儀式派研究会研究集会, 天理大学 (2014.5) ▼ 奇跡の起こる場所：ロシアにおける聖人崇拜の伝統とその現代的諸相に関する予備的考察, 「聖地の政治経済学：ユーラシア地域大国における比較研究」研究会, 国立民族学博物館 (2014.6) ▼ 小説『ウトバーラ』から読む、ロシアからカルムイクへのまなざし, 第9回「仏教と近代」研究会, 龍谷大学 (2014.7) ▼ 聖人崇拜から見るロシアのキリスト教受容の独自性, ユーラシア諸国におけるキリスト教受容の比較研究, SRC (2014.11)

田畑伸一郎 ㊦ 1 学術論文 ▼ Emergence of Regional Powers in the International Financial System (Shinichiro Tabata, ed., *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia*, 47-63, Abingdon, Oxfordshire, UK: Routledge, 2015) ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 1%台の成長に留まった2013年のロシア経済『ロシアNIS調査月報』59(5):30-52 (2014.5) ▼ Japan-Finland Bilateral Project on the Socio-economic Development of the Russian Far North, *Baltic Rim Economies* [Pan-European Institute, University of Turku], 5:32 (2014) ㊦ 3 著書 ▼ (編著) *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia*, 243 (Abingdon, Oxfordshire, UK: Routledge, 2015) ㊦ 5 学会報告・学術講演 ▼ Comparative Analysis of Inflation in Russia, Pacific Rim Conference 3: Financial and Economic Links and Institutions for Prosperity, Waikoloa Beach Marriott, Hawaii (2014.5.17) ▼ Causes of Inflation in Russia in Comparison with China and India, EACES Biennial Conference, Budapest (2014.9.5) ▼ Causes of Inflation in Russia, 2000-2013, 46th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEES), San Antonio, Texas (2014.11.21)

田村容子 ㊦ 2 その他業績 (論文形式) (2) 研究ノート等 ▼ (資料紹介) トイレの革命一九五八『連環画研究』4:30-53 (2015) ▼ 罌に墮ちた彼女：連環画のなかの「性」『連環画研究』4:118-138 (2015) ▼ 京劇研究者、劇作家齊如山 (一八七七年～一九六二年)『齊如山回想録』(中央文物供応社, 1956年)『中

国文芸研究会会報』400:91-93 (2015) (4) 翻訳 ▼(阿部沙織、池田智恵、城山拓也、津守陽、羽田朝子、平松宏子、濱田麻矢と共訳) 藤井省三、陳平原、王德威著「中国現代文学の研究および教学：中・米・日における現状と行方」『中国 21』42:35-64 (2015) ♯4 その他業績 (教科書) ▼(大東和重、及川茜、神谷まり子、齊藤大紀、中野知洋、城山拓也、大野陽介、杉村安幾子、中村みどり、和泉司、高橋俊、中野徹、日野杉匡大と共著) 中国モダンイズム研究会編『ドラゴン解剖学 登竜門の巻 中国現代文化 14 講』228 (関西学院大学出版会, 2014)

地田徹朗 ♯1 学術論文 ▼Science, Development and Modernization in the Brezhnev Time: The Water Development in the Lake Balkhash Basin, *Cahiers du monde russe*, 54(1-2): 239-264 (2014.5) ▼“Trust in Cadres” and the Party-Based Control in Central Asia during the Brezhnev Era (Sophie Hohmann, Clair Mouradian, Silvia Serrano and Julien Thorez, eds., *Development in Central Asia and the Caucasus: Migration, Democratisation and Inequality in the Post Soviet Era*, 47-79, London: I. B. Tauris, 2014) ▼アラール海災害の顕在化と小アラール海漁業への初期対応策 (大塚健司編『アジアの生態危機と持続可能性：フィールドからのサステナビリティ論』191-236, アジア経済研究所, 2015) ♯2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ベルディムハメドフ大統領訪日 (2013年9月) と日・トルクメニスタン関係の今後『ユーラシア研究』50:71-73 (2014) (5) その他 ▼(インタビュー記録) イリプロジェクトにおける知の跳躍 プロジェクトメンバーにきく・その2：地田徹朗さん (所外メンバー) (総合地球環境学研究所「地の跳躍プロジェクト」編『イノベーションの現場としての地球研知はいかに跳躍するか?』[人間文化研究機構・機構長裁量経費報告書] 72-86, 総合地球環境学研究所, 2015) ♯4 その他業績 (事典項目) ▼カザフ共和国における民族と政治：「疑似国民国家の実体化」, ソ連時代の開発と環境：社会主義的近代化とその顛末 (宇山智彦、藤本透子編著『カザフスタンを知るための60章』121-126; 127-131, 明石書店, 2015) ♯5 学会報告・学術講演 ▼環境・境界・スケール (パネル「ソビエト史研究の新展開：学際的・分野横断的研究の可能性」), ソビエト史研究会 2014 年度年次研究大会, 東京外国語大学 (2014.6.21)

▼Cooperation or Conflict? Water and Political Balances between Russia, Kazakhstan and China, Association for Borderlands Studies First World Conference, University of Eastern Finland, Joensuu, Finland (2014.6.10) ▼The Revival of the Small Aral Sea and Its Fishery, International Conference “Changing Patterns of Power in Historical and Modern Central and Inner Asia,” International Institute for Asian Studies (Netherlands), Ulaanbaatar University, Mogolia (2014.8.09) ▼災害と境界：アラール海災害及び復興過程の中での「境界」の変容 (企画責任者), 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ「ユーラシアにおける境界と環境・社会：学際的対話による包括的な「境界」知の獲得」, 奈良女子大学 (2015.2.7) ▼アラール海災害からの「復興」と小アラール海漁業, 日本中央アジア学会 2014 年度年次大会, 藤沢 (2015.03.29)

等々力政彦 ♯1 学術論文 ▼内モンゴル敖漢旗喇嘛溝の遼墓壁画に認められる、台形胴の長頸リュートについて『真宗総合研究所研究紀要』31:49-63 (2014) ♯4 その他業績 (事典項目) ▼声 (国立民族学博物館編『世界民族百科事典』478-479, 丸善出版, 2014)

宍内勇津流 ♯1 学術論文 ▼Soviet Rule in South Sakhalin and Japanese society, 1945-49 (S. Paichadze, P. Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese border Karafuto/Sakhalin* [Routledge Studies in the Modern History of Asia], 80-100, London: Routledge, 2015) ♯2 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼菅真城著『大学アーカイブズの世界』(大阪大学出版会, 2013年)『日本図書館情報学会誌』60(3):125-126 (2014) (5) その他 ▼「スチュファン・ヤヴォルスキーとフェオファン・プロコポヴィチ」に見るユリー・サマーリンのキリスト教観,「プラトンとロシア」研究会, SRC (2015.3.6)

長縄宣博 ♯1 学術論文 ▼イスラーム教育ネットワークの形成と変容：19世紀から20世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域 (橋本伸也編『ロシア帝国の民族知識人：大学・学知・ネットワーク』294-316, 昭和堂, 2014) ♯2 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼クリミア・タタール人：安住の地を求めて『ユーラシア研究』51:12-16 (2014) 増補版は [<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20141002-j.html>] (3) 書評 ▼堀川徹、大江泰一郎、磯貝健一編『シャリーアとロシア帝国：近代中央ユーラシアの法と社会』(臨川書店, 2014年)『イスラーム世界研究』8:376-380 (2015) (5) その他 ▼帝国と社会主義の遺産からウクライナ情勢を考える, 第45回北海道高等学校世界史研究大会, 札幌市教育文化会館 (2014.8.8) ▼ASEEES Member Spotlight [<http://aseees.org/membership/norihiro-naganawa>] ♯5 学会報告・学術講演 ▼反帝国主義の帝国としてのソ連：方法としての評伝カリム・ハキーモフ <間にあるもの>の現代史：ロシア・中東・東アジアにおける仲介人と境界人, 埼玉大学東京ステーションカレッジ (2015.3.10) ▼Биография Карима Хакимова как методика изучения «антиимперской империи», Пленарное заседание. Международная научно-практическая конференция «Россия и страны востока: векторы взаимодействия и сотрудничества»,

г. Уфа, Россия (2014.12.4) (ビデオ出演) ▼ Invitation to Guests of God: Bolsheviks' Transnational Hajj Enterprise, 46th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), San Antonio, Texas (2014.11.20) ▼ Реформа магометанских духовных правлений в эпоху свободы совести и слова: переосмысление роли татарской прессы в процессе формирования мусульманской общественности, III Международная научная конференция «МИР ИСЛАМА: ИСТОРИЯ, ОБЩЕСТВО, КУЛЬТУРА», Москва, Россия (2014.10.22) ▼ Появление мусульманского гражданского общества? благотворительность мусульман Волго-Уральского региона в годы Великой войны, Международная научная конференция «Великая война 1914-1918 годов: Россия, Европа и Исламский мир», Казань, Россия (2014.10.18) ▼ A Civil Society in a Confessional State? Muslim Philanthropy in the Volga-Urals Region, Anglo-American Conference of Historians, University of London (2014.7.4) ▼ Designs of Dâr al-Islâm: The Tatar Public Discussing the Muslim Administration, 1905-16, Eastern and Central European Empires, Nations, and Societies on the Verge of World War I (social imageries of Europe, freedom, future and national communities in 1914), Instytut Historii Polskiej Akademii Nauk, Warsaw (2014.6.25)

野町素己 1 学術論文 ▼ (Tomasz Kamusella と共著) The Long Shadow of Borders: The Cases of Kashubian and Silesian in Poland, *Eurasia Border Review* 5(2)35-59 (2014) ▼ “East” and “West” as Seen in the Structure of Serbian: Language Contact and Its Consequences (Ljudmila Popović, Motoki Nomachi, eds., *The Serbian Language as Viewed by the East and the West: Synchrony Diachrony, and Typology* [Slavic Eurasian Studies No. 28], 29-63, SRC, 2015) 13 著書 ▼ (A. Danylenko, P. Piper と共編著) *Grammaticalization and Lexicalization in the Slavic Languages* [Die Welt der Slaven, Sammelbaende/Sborniki No. 55], 436 (Verlag Otto Sagner, 2014) ▼ (Ljudmila Popović と共編著) *The Serbian Language as Viewed by the East and the West: Synchrony Diachrony, and Typology* [Slavic Eurasian Studies No. 28], 251 (SRC, 2015) 15 学会報告・学術講演 ▼ Does the Banat Bulgarian Language has a chance to be revived?, The 19th Balkan and South Slavic Conference, University of Chicago (2014.4)

▼ Polysemy Copying or Contact-Induced Grammaticalization? On the Oblique Passivization in Slovenian, International Conference “German Influence on the Grammatical and Lexical Structure of Slavic Dialects,” Adam Mickiewicz University in Poznan, Poland (2014.6) ▼ On the Kashubian Past Tense Form *Jô bët* ‘I was’ from a Language Contact Perspective, 39-е Заседание Комиссии по изучению грамматических структур славянских языков Международного комитета славистов, University of Ljubljana (2014.9) ▼ (Bojan Belić と) Language Emancipation in Serbia, 9th Annual Meeting of the Slavic Linguistics Society, University of Washington, Seattle (2014.9) ▼ Słowniczki gwar gorańskich Ramadana Redżeplarego jako gorańska spuścizna językowo-kulturowa, Słowiańskie słowniki gwarowe: tradycja i nowatorstwo, University of Warsaw, Poland (2014.9) ▼ Language and Identity of Gorani People, 46th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), San Antonio, Texas (2014.11.20-23) ▼ (Bojan Belić と) Issues in Southeast European Language Emancipation, International Symposium “Slavic Minorities and Their (Literary) Languages in the European Context and Beyond: The Current Situation and Critical Challenges, 早稲田大学 (2015.1)

松里公孝 1 学術論文 ▼ Orthodox Churches in Abkhazia, South Ossetia and Transnistria (Lucian Leustean, ed., *Eastern Christianity and Politics in the Twenty-First Century*, 387-401, Routledge, 2014) ▼ クリミアの内政と政変 (2009-14年) 『現代思想』42(7):87-109 (2014) 12 その他業績 (論文形式) (1) 総説・解説・評論等 ▼ 史上最大の非承認国家は生き残るか「ドネツク人民共和国」『kotoba』18:174-179 (2015) ▼ ウクライナ動乱の一年に思う『学士会報』911:30-34 (2015) 15 学会報告・学術講演 ▼ Imperial Studies of Russia in Japan, ヤゲロ大学, クラコフ (2014.6.23) ▼ Asiatic Russia: Geopolitics and Territorial Management, International Conference “Eastern and Central European Empires, Nations, and Societies on the Verge of World War I (social imageries of Europe, freedom, future and national communities in 1914),” Institute of Polish History, PAS (2014.6.24-25) ▼ Русско-китайские отношения через призму православия 1713-2013, 第6回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンス, 韓国外国語大学 (2014.6.27-28) ▼ The Russian Orthodox Church's Chinese Policy, 46th Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies (ASEEES), San Antonio, Texas (2014.11.20-23)

望月哲男 1 学術論文 ▼ Сравнимая несравнимые: из опыта сравнительного исследования культур Евразийских стран, *Вестник Азиатско-тихоокеанской ассоциации преподавателей русского языка и литературы*, 4:34-37 (2014) ▼ 比喩論から見るトルストイとナボコフ: 『アンナ・カレーニナ』論をめぐって『Krug 7』[日本ナボコフ協会] 25-33 (2015.3) 12 その他業績 (論文形式) (3) 書評 ▼ 太田丈太郎著『「ロシア・モダニズム」を生きる』(成文社, 2014) 『熊本日日新聞(朝刊)』6 (2015.1.11)

(4) 翻訳 ▼アレクサンドル・プーシキン著『スペードのクイーン／バールキン物語』297 (光文社古典新訳文庫, 2015) (5) その他 ▼トルストイと現代①悔い改めよ『秋田魁新報』8 (2015.3.27) ▼The Practice of Color Photography in S.M. Prokudin-Gorsky's Rodinovedenie, SRC seminar "Seeing History: Photo and Film as a Primary Archival Source," SRC (2014.8.26) ▼バールキンな日々: 木村先生に教わったこと『SLAVISTIKA』XXX:13-17 (2015.3) ①5 学会報告・学術講演 ▼比喩論に見るナボコフのトルストイ観, 日本ナボコフ学会シンポジウム「ナボコフとロシア文学」, 東京外国語大学 (2014年4月26) ▼Чему учит опыт переводчика, медленного читателя-путешественника?, III Международный конгресс переводчиков художественной литературы, Москва, (2014.9.5) ▼Восприятие толстовства в Азии на фоне русско-японской войны: случай Ганди, 2014年日本ロシア文学会研究発表会, 山形大学 (2014.11.2) ▼Переводчик как читатель: Из опыта перевода художественных текстов с русского на японский, Lecture for Slavic Seminar, Stockholm university (2014.12.2) ▼世俗聖地としてのロシア地主領地: ヤースナヤ・ポリャーナを中心に, 杉本良男主催「聖地の政治経済学: ユーラシア地域大国における比較研究」, SRC (2015.1.31) ▼Discussing Anti-utopian Novels in the Age of Post-globalism: From My Recent Experience in Stockholm, ワークショップ「ソ連崩壊と歴史ファンタジー文学の可能性」(科研費研究: ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意義に関する超域横断的研究 亀山郁夫主催), 神田学士会館 (2015.2.14)

会議 (2015年7月)

◆ センター共同利用・共同研究拠点運営委員会 ◆

2015年度第1回 7月12日(日)

議題

1. 共同利用・共同研究拠点の活動について
2. 共同利用・共同研究公募のあり方について
3. 第3期中期目標・中期計画期間における共同利用・共同研究拠点のあり方について
4. その他

◆ センター協議委員会 ◆

2015年度第1回 7月14日(火)

議題

1. 2014年度支出予算決算(案)について
2. 2015年度支出予算配当(案)について
3. 助教の人事について
4. その他

[事務係]

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース141号以降のセンター訪問者(客員、道央圏を除く)は以下の通りです(敬称略)。
[田畑/大須賀]

5月25日 本村真澄(独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構)

6月1日 梅村博昭

6月15日 Gail Fondahl(ノース・ブリティッシュ・コロンビア大、カナダ)、オユンバートル・ムンヘジン(慶應義塾大・院)

- 6月25日 秋山徹（早稲田大）
 7月9日 穴戸仙助（認定NPO法人アジア教育友好協会）
 7月12日 窪田順平（総合地球環境学研究所）、黒木英充（東京外国語大）、志摩園子（昭和女子大）、下里俊行（上越教育大）、高倉浩樹（東北大）、月村太郎（同志社大）、豊川浩一（明治大）、長興進（早稲田大）
 7月13日 Yuthpong Chantrawarin（メーファールアン大、タイ）、Wanwalee Inpin（同）、Siriporn Wajjwalku（同）
 7月21日 Bosya Kornusova（カルムイク国立大、ロシア）
 7月22日 ヨフコバ四位・エレオノラ（東京大）
 7月27日 野部公一（専修大）
 7月28日 醍醐龍馬（大阪大・院）
 7月29日 Nikolai Aladin（ロシア科学アカデミー動物学研究所）、Ivan Aladin（ロシア科学アカデミー
 ~8月1日 図書館）、Philippa Hetherington（シドニー大、オーストラリア）、Samuel Hirst（サントペテルブルグ・ヨーロッパ大、ロシア）、Ulrike Huhn（ブレーメン大、ドイツ）、Artemy Kalinovsky（アムステルダム大、オランダ）、Igor Khristoforov（高等経済学院、ロシア）、Masha Kirasirova（ニューヨーク大アブダビ校、UAE）、Boris Kolonitsky（サントペテルブルグ・ヨーロッパ大、ロシア）、David McDonald（ウィスコンシン・マディソン大、米国）、Nikoray Mitrokhin（ブレーメン大、ドイツ）、Alexander Morrison（ナザルバエフ大、カザフスタン）、Irina Papkov（ジョージタウン大、米国）、Ekaterina Pravilova（プリンストン大、米国）、David Schimmelpenninck van der Oye（ブロック大学、カナダ）、Marsha Siefert（中央ヨーロッパ大、ハンガリー）、Scott Spector（ミシガン大、米国）、Melissa Stockdale（オクラホマ大、米国）、Willard Sunderland（シンシナティ大、米国）、Sören Urbansky（ルートヴィヒ・マクシミリアン・ミュンヘン大、ドイツ）、アティカ・ピンティ・アジャル（同志社大）、秋田茂（大阪大）、上垣彰（西南学院大）、海野典子（東京大・院）、小野亮介（慶応義塾大・院）、黒木英充（東京外国語大）、後藤春美（東京大）、左近幸村（新潟大）、篠原琢（東京外国語大）、シュラトフ・ヤロスラブ（広島市立大）、田牧陽一（日本対外文化協会／日口交流協会）、鶴見太郎（埼玉大）、登利谷正人（上智大）、長沼秀幸（東京大・院）、長興茅（オックスフォード大、英国）、藤沢潤（早稲田大）、前川一郎（創価大）、水谷智（同志社大）、溝辺泰雄（明治大）、山根聡（大阪大）、吉田浩（岡山大）
 8月5日 村知稔三（青山学院女子短期大）
 8月10日 Laada Bilaniuk（ワシントン大、米国）、孫柏（中国人民大）
 8月13日 Paul Wexler（テルアビブ大、イスラエル）
 8月27日 Artyom Lukin（極東連邦大、ロシア）、大場佐和子（神戸大・院）

◆ 研究員消息 ◆

家田修研究員は2015年5月23日～6月29日の間、資料収集、現地調査及び打ち合わせのため、英国、ウクライナに出張。

野町素己研究員は5月28日～6月18日の間、資料収集、研究打合わせ、研究会“Languages Meet in the Central Balkans”出席・発表及び現地聞き取り調査のため、セルビア、マケドニア、アルバニア、ギリシャ、ポーランドに出張。

岩下明裕研究員は6月16～19日の間、モニターツアー参加による現地調査及び研究打ち合わせのため、ロシアに出張。7月2～3日の間、停戦70周年（韓日国交樹立50周年）記念学術会議「揺れる東アジア：歴史を超えて新しい秩序への再編まで」への出席及び研究発表のため、韓国に出張。

田畑伸一郎研究員は6月24～29の間、学会“First World Congress of Comparative Economics”への出席のため、イタリアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は7月9日～8月16日の間、資料収集のため、米国に出張。

[事務係]

目 次

研究の最前線	1
2015 年度夏期シンポジウム「ロシアとグローバルヒストリー」開催される／センター 60 周年／北大における学際的な北極域研究のスタート／2015 年度科学研究費プロジェクト／北大祭期間中にスラブ・ユーラシア研究センターを一般公開／UBRJ セミナー「根室からみた北方領土問題」を開催／UBRJ セミナー「東南アジアの境界：タイ北部国境から眺める」を開催／ジョイント・ワークショップ「社会主義の記憶と現在：宗教・政治・ナショナリズム」を開催／九州大学にて第 3 回アジア太平洋ボーダースタディーズ・セミナーを開催／2015 年度鈴川・中村基金奨励研究員決まる／2015 年度特任教員（外国人）決定／グチノヴァさんの滞在／クレアさんの滞在／プザノヴァさんの滞在／研究会活動	
人事の動き	10
学術研究員紹介	
ICCEES IX 幕張大会参加記：国際会議でのパネル組織の楽しさ by 地田徹朗	10
現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成：シロンスクを題材に（1） by ズビグニェフ・グレン	14
学界短信	17
ソビエト史研究会 2015 年度年次研究大会が開催される／学会カレンダー	
図書室だより	18
目録に「スラブコレクション」の表示／日本サハリン協会所蔵資料の一部移管	
編集室だより	19
<i>Acta Slavica Iaponica</i> / <i>Slavic Eurasian Studies</i> 29 <i>Transboundary Symbiosis over the Danube: II</i> の刊行	
誰が 何を どこで	20
会議	26
センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター協議委員会	
みせらねあ	26
人物往来／研究員消息	

2015 年 9 月 17 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	望月哲男
発行者	田畑伸一郎
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
